東京都千代田区神田駿河台 3-2-11
連合会館１階　原水禁気付
「さようなら原発1000万人アクション」
実行委員会
電話　03-5289-8224
ＦＡＸ 03-5289-8223
【郵便振替】
00100-8-663541　加入者名
「フォーラム平和・人権・環境」
『さようなら原発 1000 万人アクション』と通信欄に明記

さようなら原発 1000万人ニュース

第25号

2018年12月18日

さようなら原発 東海第二原発の運転延長反対の声を上げる

11月7日、原子力規制委員会は、日本原子力発電（日本原電）東海第二原発（茨城県東海村／1978年11月28日運転開始）の運転期間を最長20年延長できることを認めました。これまでの原発の運転期間を40年とする原則を形骸化させるもので、老朽化原発は、事故のリスクや労働者の被曝の増大など様々な問題が指摘されています。東海第二原発は、周辺30キロ圏内に約96万人が暮らし、都心からも110キロほどの距離にあり、一度過酷事故が起きればその被害は計り知れないものとなります。

さようなら原発1000万人アクションは、41年目に入る11月28日に、運転延長を認める政府や国会に対して抗議の声をあげました。昼休みに開かれた集会は、東京や茨城をはじめ神奈川・埼玉などから約60人の参加者がありました。

老朽原発を強引に再稼働させるために、パブコメ後の補充書類申請など合格ありきの原子力規制委員会の姿勢に対する抗議の声が響きました。

また、再稼働には自治体の同意を必要とするのに、周辺自治体には拒否権はないとする日本原電副社長の発言はとても許せません。周辺自治体首長の抗議に、訂正と謝罪を言っても空虚に聞こえるだけです。

日本原電は再稼働反対の署名や抗議声明を提出しようにも一切受け取ろうとしません。民意を無視し、自治体の声さえ軽視する日本原電には、再稼働の資格はありません。集会参加者からは「日本原電は原発の廃炉に特化すべき」、茨城からは「茨城県は原電の実験場ではない」の発言がありました。

老朽化原発であることをはじめ、首都圏にあり事故時の避難など、課題山積の東海第二原発は廃炉しかありません。

もっか「原子力緊急事態宣言」発令中

呼びかけ人・ルポライター　鎌田　慧

福島原発事故から、もうじき８年。

「古京はすでに荒れて、新都はいまだ成らず。ありとしある人は皆浮雲の思ひをなせり」(『方丈記』)

福島原発事故後の周辺を歩くと、大地震のあと、被災地「京」を探訪していた、鴨長明の絶望感が身に沁みてくる。しかし、フクシマは大地震ばかりではない。大津波、大爆発、大放射能が一挙に襲いかかったあと、大汚染水、大汚染土が残され、100 年以上はかかる廃炉の大工事。これから、被災の後始末はほぼ永遠につづけられる。

この未曾有の「大厄災」をもたらしたのは、放射能汚染である。大気中に放出されたセシウム 137 は、ヒロシマの 168 発分にも達する（小出裕章氏)。すでに 100 万トンを越える放射能汚染水が、福島第一原発サイトに林立するタンクのなかに溜まっている。流れ出した核燃料は高熱で溶解しつづけている。

核爆発事故の「フクシマ」のあと、人間と自然の現在、そして未来はどうなるのか。といって、はたして「フクシマ」の厄災は、福島県だけに限定されるのか。どこから、どこまでの地域を、放射能汚染地というのか。

フクシマからもうじき８年になろうとしている。「アンダーコントロール」とオリンピック誘致に虚言を弄した、安倍首相の卑劣さがますます際立ってきた。実のところは、いまだ「原子力非常事態宣言」発令中なのだ。

首都圏での最大の課題は、東海第二原発再稼働を止めることだ。これは東海村や原発から 30 キロ圏内の自治体住民 96 万人ばかりか、100 キロ圏内にある東京都住民 1200 万の願いでもある。

すでに使用限界の 40 年をすぎて、さらに 20 年も稼働させるというのは、人間のいのちや動物、鳥、昆虫、魚介類のいのちを顧みない暴挙である。たかだか事故に至るまでの限られた時間の儲けのために、人間として責任の取りようもない行為を行うのは、未必の行為というべきだ。尋常の沙汰ではない。なぜ電力会社の儲けのために、住民が避難訓練を行い、ヨウ素剤を飲まなければならないのか。

地震に弱く、降りかかる火山灰も防げない、すでに大災害をもたらし、なおまったく解決できないまま、さらにもっとも危険な地域の原発再稼働は、人命を省みない、悪魔的な行為である。人類にとって、使用済み核燃料は数万年に及ぶ厄災をもたらす。核廃棄物である使用済み核燃料は、人類にたいする魔の物体である。

「原子力村」に残存する、自民、公明両党の政治家、電力および重工業、銀行の経営者、経産省など一部の官僚、御用学者、御用ジャーナリスト、作家、評論家など、カネと出世目当ての一握りの人間たちの罪業は深い。

安全性と経済性ではすでに破綻した原発を、安倍内閣は死の商人よろしく、海外輸出で切り抜けようとした。が、その野望も行き詰まっている。

さらに小型原発と小型原爆の開発で、悪魔的存在を小さくみせて、抵抗を回避しようとしているが、これまた倫理に反する。

原子力船「むつ」も一回の実験的な航海で挫折、高速増殖炉「もんじゅ」も破綻、六ヶ所村の再処理工場は、建設発表から 35 年たってなお試運転にさえ成功していない。MOX 燃料工場も完成できず、大間の MOX 燃料専用原発も未完成のままだ。

核燃料サイクルの破綻は、原発政策の終わりを示している。原発行政は黄昏れ落陽を迎えている。

福島原発事故から８年目の新年を迎え、大胆に、確信をもって、未知の友人たちと手を結び、さようなら原発運動をさらに拡大させよう。

「母は東電に殺された」東電刑事裁判、遺族の叫び
12月論告求刑、東京地裁は厳正な判決を！

福島原発刑事訴訟支援団　佐藤和良

「遺体と対面した時、骨と皮でミイラのようだった。被告人はこの時の気持ちがわかりますか。被告人は聞いてください」「『部下に任せているから自分の責任ではない』としか思えません」「素直に全責任は我々上層部にあると、なぜこのくらいのことが言えないのですか」「母が死んだのは急性心不全ですが、東電に殺されたと思っています」、無念の死を遂げた双葉病院のご遺族の陳述です。

日本最大の公害事件、東京電力福島第一原発事故の責任を問い、業務上過失致死傷罪で強制起訴された旧経営陣３被告の刑事裁判は、東京地裁刑事第４部（永淵健一裁判長）において、争点の地震津波の予見可能性と結果回避可能性を巡り、証人尋問が急ピッチで進められ、11 月 14 日の第 34 回公判で、被害者遺族の意見陳述が行われました。

福島第一原発から南西約 4.5km の双葉病院と南西４km の介護老人保健施設ドーヴィル双葉の患者や入所者が避難の過程や搬送先で、44 人の尊い命が奪われました。

両親を亡くした女性は、事故後７年の時が経つが、避難中で何も変わらないこと。当時原発から３キロの大熊町熊川地区に居住しており、放射能汚染のために避難し、「事故がなければ、あの地を離れることも両親がなくなることもなかった」「死に目に会えず、通夜も葬儀も出せなかった」と辛い胸の内を語り、「東京電力を許すことはできません。対策をとっていれば、女川や東海のように事故を防げたと思うと悔しい」「今、自宅の周りは中間貯蔵施設となり、土地を手放しました。原発事故で町から追い出されるとは思いませんでした」「わかっていて爆発したのは未必の故意です。私は死んでも許すことはできません」と述べました。

祖父母を亡くした男性は、「祖父母が死亡したこと。その悲しみ、後悔は時間が経っても消せません。原発事故は、想定外では済まされません。祖父母は放射能さえなければ死なずにすみました。祖父母の死の責任はあります。そのために裁判に参加してきました」「そもそも対策を取る気があったのか。責任を取ってもらえないと教訓にならない」と処罰を求めました。

勝俣被告は表情一つ変えず、書面を見ていました。10 月に４日間開かれた被告人質問で３被告は、「事故により、ご迷惑かけたことをお詫びします」などと、遺族や福島からの傍聴者に尻を向け、裁判長に対して陳謝して見せましたが、「記憶にない」「メールはない」「認識もない」「指示はしていない」「権限はない」と、これまで立証されてきた事実を徹頭徹尾、全面否定。職務権限がなかったなどと、動かぬ証拠まで否定して、自己保身、組織防衛の為の隠蔽を行い、最悪の責任逃れに終始しました。

３被告は、裁判所に証拠採用された、2008 年当時、地震津波対策の事実上のトップ、新潟県中越

沖地震対策センター長であった山下和彦氏の検察官面前調書に示された「部内で耐震バックチェックに（文部科学省地震調査研究推進本部の）長期評価の取り入れを決定。武黒・武藤に伝えられ、平成20年（2008年）2月26日に勝俣・清水に中越沖地震対応打合せ＝御前会議で報告した。勝俣からも清水からも反対はなく、耐震バックチェックについての原子力設備管理部の方針は了承された」「平成20年３月11日の第2453常務会で吉田昌郎氏が報告して承認」という内容を否定するのに必死でした。

勝俣被告は「原子力安全を担うのは原子力・立地本部。責任も一義的にそこにある」と、責任を全て現場に転嫁しました。

被告は真実を語らず、東京地裁が現場検証の必要性を認めませんでした。しかし、これまで立証されてきた事実、津波は予見され、事故は回避できたという真実を隠すことはできません。

未曾有の放射能汚染と被曝が続く福島原発事故。誰一人責任を取らぬこの国家の現状に対し、事故の真相を究明し責任を問う刑事裁判は、いよいよ12月26日27日に、検察側指定弁護士による論告求刑、そして2019年3月12日13日には最終弁論、結審を迎えます。

無念の死を遂げた被害者遺族の証言を共有し、厳正判決を求める署名の拡大を呼びかけます。各地で報告会を開催し、厳正判決を求める世論を盛り上げていきましょう。

署名用紙は以下からダウンロードお願いいたします。

https://shien-dan.org/wp-content/uploads/syomei-A4.pdf

原発事故被害を覆い隠そうとする現実
＝福島の今＝

全労協脱原発プロジェクト　瀧　秀樹

11月17日～18日、全労協脱原発プロジェクトでは「福島の現状を知り、脱原発の取り組みを強化しよう」と福島フィールドワークを催行した。

放射能汚染ごみ焼却問題に取り組んでいる和田央子さんの案内で福島原発事故後７年を経過した今の福島はどうなっているのかについて学んだ。

一日目、まずは小名浜に近い海岸に建設されている常磐共同火力勿来発電所を近くから眺める。3000億円をかけた発電所は石炭火力。CO_2排出量の多い石炭火力をなぜ今作るのか疑問を感じる。小名浜の沖には新たに埋め立てて造られた人工島と、そこに渡る小名浜マリンブリッジが架かる。人工島は大規模貯炭場だ。

小名浜から国道６号線を北上すると右手にＪビレッジ、その向かい左手には「遠隔技術開発センター」がある。遠隔ロボットの開発をしている。見学はできなかったが軍事産業のかかわりも深い施設だ。

さらに北上し右手に福島第二原発入口近くの国道沿いには「りぷるん福島（旧エコテックセンター）」があり、今回は予約をして施設内を見学した。10万Bq/kg以下の焼却灰などの最終処分場だ。「りぷるん福島」の広報施設では、いかに安全に最終処分のための処理が行われているかの展示が行われ係員が説明してくれる。

気になったのは焼却場から現場まで焼却灰袋を運ぶトラック運転手の被曝。説明をしてくれた職員曰く「ドラム缶に詰めた場合で（線量は）20から30μSv位ですかね」とのこと。

実際の処分場も案内してもらった。入口ゲート付近の空間線量は0.4μSv/h程。高い。入口のガードマンはマスクをするわけでもなく仕事をしていた。最終処分場は漏水防止シートで覆われた中に特殊なパッケージに詰められた灰が重ねられ埋設して最終処分となる。シートは本当に破れないのか。不安だ。

次は富岡仮設焼却場、楢葉町仮設焼却炉、焼却場周囲のフレコンバックの山を車中から見た。この施設も３年ほど使うと解体される。数百億円かけているが……。

改装なったJR富岡駅に立ち寄り。夕方はいわ

き常磐公民館で現地の組合との交流会。いわき水道労組、いわき自由労組、福島原発労働者相談センターの狩野市議を交え意見交換。いわき水道労組の「事故直後、住民には外に出ないようにと車で呼びかけたが、呼びかける自分たちは大丈夫なのか心配だった」という当時の生々しい報告に事故直後の緊張を感じた。狩野市議からは最近の原発労働相談センターの相談事例の紹介を受けた。

二日目はまず和田央子さんの講演学習会。放射能ごみ焼却場の問題を中心に学んだ。放射能汚染ごみの焼却は「ごみの減容化」が目的とされるが、実際はセシウムを効果的に分離させるために炭酸カルシウムを大量に加えるため 20 トンのごみを焼却した後に出てくる焼却灰は 25 トンになるなど逆に増えており、実証実験は失敗だとの説明に皆驚く。しかもその焼却灰は「リサイクル」され、建設資材としてコンクリートに混ぜられ流通させようとしている。放射能汚染を全国にばらまこうというのだ。

次は三春町の西部工業団地内にある「こみゅたんフクシマ」を見学。いかに福島の復興事業が進められているかの広報施設だ。「霧箱」の展示では「自然界にもこんなに放射線が飛んでいる」のを見せ、「放射能は心配することない」と刷り込もうとしている。県内の小学校では５年生なると見学させられているようだ。

最後は田村市大越町の汚染樹木を使うバイオマス発電所計画地へ向かった。建設予定地はすでに整地が済み、2020 年３月稼働を予定している。盆地の中の高台の建設予定地のすぐそばには民家が立ち並び１㎞以内にこども園や小学校もある。盆地では煙は盆地内にただよう。汚染の少ない心材を燃料に使うという当初説明は変わり、汚染度の高い樹皮（バーク）も燃やすことになった。事業計画書も開示されていないという。反対運動をしている「大越町の環境を守る会」の方々７名は口々に、住民をだまし資料を隠ぺいしたまま進められる木質バイオマス発電に大きな憤りを隠せない。

二日間駆け足でのツアーだったが「復興」の名のもとに住民の不安を押しつぶすように様々な事業がすすめられ、福島県が原発事故後の広範囲の放射能汚染にどう対処するかの実験場になっているのではないかという思いが募ってきた。

2019 原発のない福島を！県民大集会

2011 年 3 月 11 日発生した東日本大震災・東京電力福島第一原発事故からまもなく８年目を迎えようとしています。「原発のない福島を！」を合言葉に、毎年県民集会を開催してきました。

今年、県民が求めていた福島第二原発の廃炉が表明され、事故後７年を経て福島の原発すべてが廃炉となりました。しかし福島では、５万人近い県民がいまだ避難生活を余儀なくされている一方で、帰還の強制も始まっています。さらに生活の再建や復興、風評被害、健康被害、除染廃棄物の処理問題、トリチウムの海洋放出の問題など様々な課題が山積しています。

そのような中で、来年も県民大集会が開催されます。詳細はこれからですが、フクシマを風化させないためにもぜひ全国各地から現地県民集会への参加を呼びかけます。

⑴ 日　時　　2019 年３月 16 日（土）　午後
⑵ 会　場　　福島県県教育会館　大ホール　（駐車場なし）
　　福島市上浜町１０−３６　　☎０２４−５２３−０２０６
　　＊ＪＲ福島駅から徒歩 20 分
⑶ 主　催　　原発のない福島を県民大集会福島県実行委員会
　　連絡先　「原発のない福島を！県民大集会」実行委員会事務局
　　〒 960-8105 福島市仲間町４- ８ラコパふくしま４Ｆ
　　福島県平和フォーラム
　　TEL 024–522-6101 ／ FAX 024-522-5580
　　http://fukushima-kenmin311.jp/
　　＊詳細については現段階では未定ですが、時間や内容等が決まり次第ホームページにアップされますので、そちらをご覧ください。

9.17 さようなら原発全国集会

9月17日に東京・代々木公園で「いのちをつなぎ　くらしを守れ　フクシマと共に」をスローガンに「さようなら原発全国集会」が開かれ、全国各地から8000人が参加しました。

集会は俳優の木内みどりさんの司会で進められ、呼びかけ人でルポライターの鎌田慧さんが主催者を代表してあいさつに立ち「福島原発事故から7年半が過ぎ、原発に反対する人が圧倒的だが、一部の利益のために再稼働されようとしている。原発を認めない運動をさらに強めよう」と呼びかけました。また、同じく呼びかけ人で作家の澤地久枝さんは「ひどい政治が続いているが、原発を許さない思いと、沖縄の知事選挙とつなげて、あきらめずに発信を続けよう」と訴えました。

フクシマからの訴えでは、神奈川県内に避難をしている「福島原発訴訟かながわ原告団」の村田弘さんが「内堀雅雄・福島県知事は2020年3月までに帰還困難地域を含め、仮設住宅をなくす計画だ。東京オリンピックまでに被災者を切り捨て、整理をしたい安倍政権の方針を受けたものだ」と批判。福島原発刑事裁判支援団の佐藤和良さんも「裁判で、東電が地震・津波対策の必要性がわかっていたのに、経営優先で対策を怠ったことが明らかになった。これらの責任を判決ではっきりさせたい」と支援を呼びかけました。

当面の焦点になっている茨城県の東海第二原発の再稼働問題について、東海第二原発訴訟原告団の大石光伸さんが「再稼働阻止が福島と連帯する道だ。東海原発を所有する日本原燃は原発を動かす資格はない」と指摘。原発ゼロ法案を求める「原発ゼロ・自然エネルギー推進連盟」の吉原毅さん（城南信用金庫顧問）も「原発の耐震設計は一般住宅の10分の1しかないことが明らかになった。九州などの原発で事故がおきれば、日本全国が被害を受ける」と、早急に原発の全廃を求めました。

沖縄の辺野古新基地問題について「辺野古の海を土砂で埋めるな！首都圏連絡会」の与儀睦美さんが「今、沖縄県知事選挙の真っ最中であり、自民党が支援する候補は期日前投票に動員をかけている。各地で沖縄と連帯してほしい」と強調。「戦争させない・9条壊すな総がかり行動実行委員会」の福山真劫さんは、危険な安倍政権と対決し「憲法改悪の発議阻止、沖縄新基地建設撤回、東アジアの平和確立を当面の柱に闘いを」と呼びかけました。

最後に閉会あいさつとして、呼びかけ人で作家の落合恵子さんが「いのちと暮らしを犠牲にする政治はまっぴらだ。防衛よりも防災が大切だ」と、安倍政権と対峙しようと訴えました。

参加者は好天の中、集会後は渋谷駅前と、原宿駅や表参道を通る2つのコースでデモ行進を行い、コールやプラカードで通行者に訴えました。また、集会に先立ち、音楽のライブ演奏も行われ、俳優でミュージシャンのうじきつよしさんなどが自作の曲で脱原発を呼びかけました。